

の記する處を見るに（張の旅行は第三代貴由汗の治世丁未の年、即ち一二四七年にして窩濶台の治を去ること六年なれとも、其間空位の五年に亘るものあり、驛傳の有様等は蓋し窩濶臺時代と殆んと同様なりしなるへし）ゴビ沙漠の東邊を横斷し、魚兒樂（今のタールノール）に至るの間漠中の旅行に七驛を経たりとなす、而して同し道を有名なる丘長春の道程に見るに此間四日或は五日を費せり、もとより漠中の馬行兩者とも其の速力に於て甚たしき相違ありとも思へず、即四五日の行程に於て七驛の存せしを知るへし、而して此間兩者の經し道は、其沿路に於て實に窩濶台汗の時に創設せる驛舎の存せるものにして、支那との境なる野狐嶺下に起りて和林或は更に其の其西方に通せるものに外ならず、更に西方の有様を見るに、ルブルキーは其旅行記に於てキルギス荒原を通行せる模様を記して曰く『……吾等は頗ふる歩調を速めぬ、これ吾等の經る處既に一物の認むべきものなく、たゞ相互に一日程を離れて、使者の接待の爲めに駐在せる人即ちジャムに遭遇せるのみなればなり』（ロックヒル註ルブルキー旅行記一六〇頁）と云ひ、其他書中諸所に於て荒原以外の地にありては一日二回、三回、或は七回の多きに及びて迄も驛舎に就て新馬を取り換へてその旅行を繼續せしことを記せり、要するに驛舎設立に便なる地或は其必要の存する地に於ては之れか配置繁く、荒原沙漠等之に不便にして且つ通行運輸等の事故多からざる所にては、其數少かりしか如し、而して相互驛舎の距離長き地にありては供給の馬匹等は頗ふる強健精銳のものなりしこと、またルブルキーの記する所なりとす。

此等蒙古領の各地を連らぬる驛傳の中樞は、之れを各汗國相互の政府に於いて司とり裏海アラル海北方の地は拔都汗の治下に屬し、中亞の地は察合台汗に、エミル河流域地方は窩濶台汗に、蒙古本部、北方支那等は蒙古大汗の直